

P-35 当院におけるイブラグリフロジンの使用状況

○東 佑輔、藤尾 実穂、前田 真由子、初田 真穂、千保 円、山本 みどり、小林 真弓、大野 真孝、桂 智美、高橋 知孝、井本 孝子、高村 志保、岸本 静佳、鹿島 孝子、兵頭 純子
(姫路循環器病センター 薬剤部)

【目的】

2014年4月に、インスリンに依存しない新たな作用機序の糖尿病薬として、SGLT2阻害薬であるイブラグリフロジンが発売された。優れた臨床効果が期待できるが、特有の副作用を有するイブラグリフロジンの安全な使用を推進するため、当院におけるイブラグリフロジンの安全性と効果について調査したので報告する。

【方法】

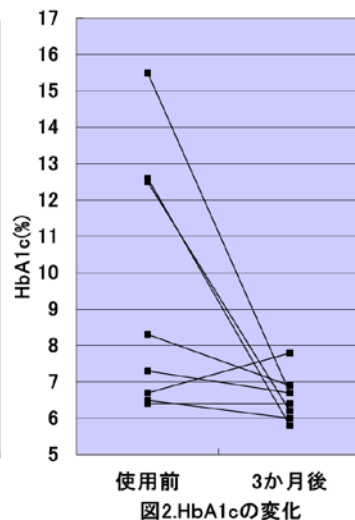
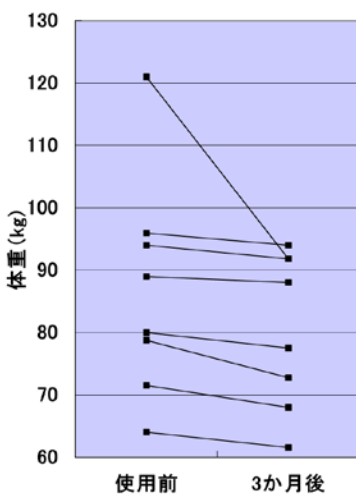
イブラグリフロジン発売からの1年間(2014年4月から2015年3月)に、当院糖尿病内分泌内科からイブラグリフロジンが処方開始された患者について、服用後3か月間の年齢、BMI、HbA1c、体重、副作用等について後ろ向きに調査し、HbA1c、体重の変化について検証した。検定方法はWilcoxon検定を用いた。

【患者背景】

対象患者は10名で、男女の割合は、男性8名、女性2名。服用開始時の患者区分は、入院6名、外来4名。服用開始時の平均年齢は、 48.6 ± 11 歳。服用開始時の平均BMIは、 $29.7 \pm 5.98 \text{kg/m}^2$ となった。10名の内2名はイブラグリフロジンを3か月以内に中止となった。

【結果】

イブラグリフロジン服用後、体重は有意に減少し($p=0.012$) (図1)、HbA1cは減少傾向であった($p=0.063$) (図2)。



ビルダグリプチン 100mg/day でコントロールしていたがHbA1c悪化のため当院外来処方としてイブラグリフロジン 50mg/day 追加となった。イブラグリフロジン 50mg/day 追加後、HbA1c 8.3%から7.8%に改善するも脱水の症状あり、服用開始約2か月半でイブラグリフロジン中止となった。その後、ビルダグリプチン 100mg/day にメトホルミン 500mg/day が追加された処方でのコントロールとなった。

事例2

患者背景：31歳、男性、HbA1c 8.3%、体重 87kg、Crea 0.92mg/dL、外来患者

メトホルミン 1500mg/day でコントロールしていたがHbA1c悪化のため当院外来処方としてイブラグリフロジン 50mg/day 追加となった。イブラグリフロジン 50mg/day 服用後、気分不良の症状あり、服用開始後3日でイブラグリフロジン中止となった。その後、メトホルミン 2000mg/day でのコントロールとなった。

【考察】

イブラグリフロジンを開始した患者はそのほとんどの症例でHbA1c、体重の減少が見られ、イブラグリフロジンの効果が示唆された。10症例中2例(脱水1件、気分不良1件)がイブラグリフロジン中止となったが、入院を必要とする重症度ではなかった。今回中止となった患者はともに外来患者であり、入院患者では中止となる事例はなかった。

【結論】

イブラグリフロジンの有効性・安全性が示唆された。患者には、起こりうる副作用・副作用の対策を繰り返し説明することで、副作用の未然回避・副作用の早期発見につなげることが出来る。このことから、起こりうる副作用、及びその予防方法を使用患者に繰り返し説明することが重要と思われた。

今後、他の医療スタッフと協働して薬剤師が患者個々に合った説明を行い、イブラグリフロジンのさらなる適正使用に貢献していきたい。また、今回調査患者数が少なかったため、今後も新たなイブラグリフロジン使用患者に対し副作用等の調査を継続していきたい。

<イブラグリフロジン中止事例>

事例1

患者背景：64歳、男性、HbA1c 8.3%、体重 79kg、Crea 0.67mg/dL、外来患者